

コース概況 1 ニセコ連峰縦走（イワオヌプリ～ニトヌプリ～チセヌプリ）

今大会の会場地である、イワオヌプリ、ニトヌプリ、チセヌプリは、ニセコ積丹小樽海岸
国立公園に含まれるニセコ連峰と呼ばれる山域に属する山である。ニセコ連峰は、岩内町、
共和町、倶知安町、ニセコ町、蘭越町にまたがり、東西およそ25kmに連なる火山群であ
り、最高峰は標高1308mのニセコアンヌプリで、この山から、連峰の最も西に位置する
標高1211.7mの雷電山まで、長大な縦走路が開かれている。この日の山行で使用する
国土地理院発行25,000分の1地形図の図葉名は「チセヌプリ」と「ニセコアンヌプリ」で
あるが、いずれも磁北は西偏およそ10度である。

イワオヌプリは、ニセコ山系で最も若い火山である。頂上部の火口が馬蹄型にへこみ、斜
面の各所に黄色い硫黄の結晶がたくさん見つかる。アイヌ語名もイワウ・ヌプリ（硫黄の山）
である。山の姿もニセコの他の山に比べ急峻な岩山で、遠くからでも一目でそれとわかる特
徴的な山である。イワオヌプリの登山口は五色温泉のそばにある。登山口の横に流れる川は、
ニセコアンベツ川だ。ニセコアンベツ川にかかる橋を越えたところにはお花畑があり、ガン
コウラン、イソツツジ、シラタマノキ、アカモノが咲いている。登山ポストはおよそ標高8
20m付近にあり、蘭越町に位置する。登山ポストを越えて、木でできた階段を登ると、か
ん木帯に入る。かん木帯には、マイヅルソウ、ツバメオモトが多い。6月中旬頃までは、こ
こから先は、残雪に覆われていることが多い。

標高930m付近に、直進するルートと右に分かれる分岐（イワオヌプリ分岐）があり、
進路を右（東）にとり、イワオヌプリへ向かう。岩の多い斜面には、コケモモ、ガンコウラ
ン、イソツツジ、ミヤマハンノキ、ハイマツが多い。かん木帯から出るため、眺めがよくな
る。ニセコアンヌプリが南東に見えるようになる。

馬蹄型の大きなクレーターの縁に出ると、正面奥にはイワオヌプリの頂上が見える。火山
灰や火山れきの斜面であり、どこでも歩けるため、ガスが出た際は迷いやすいので注意が必
要である。山の斜面には、球形の枕状の溶岩、硫黄が吹き出した跡など、火山が活動した生々
しい形跡が残っている。イワオヌプリの標高は1116mであり、1116m地点は倶知安
町に位置するが、登山道はその手前でUターンしている。イワオヌプリの頂上は平坦な火山
灰地だ。頂上らしいものが何もなく、鉄製の標識をコンクリートで固めたケルンが立ってい
る。頂上からは、大沼やニセコの全山、羊蹄山が見える。イワオヌプリの山頂の西には標高
1039mの小イワオヌプリがある。本峰のイワオヌプリと小イワオヌプリは、ともに輝石
安山岩からなる溶岩円頂丘である。

イワオヌプリから下山し、イワオヌプリ分岐から進路を右に（北）に進むと、すぐにもう
一つの分岐がある。右（北）に進むとかつての硫黄鉱山跡を経由し、大沼に至る。今回は左
（西）のニトヌプリへ進む。

ニトヌプリ（北峰）の標高は1080mで、その山頂上を市区町村界が通っている。市区
町村界の東側が倶知安町で、西側が蘭越町である。北峰と南峰を持つ双耳峰であり、登山道

は北峰を通っている。北峰も南峰も輝石安山岩質の溶岩噴火によって作られたものだ。ニトヌプリから北西へ下りてゆくと、岩が大きく、意外と歩きにくい。標高832mで道道66号（パノラマライン）にぶつかる。標高832m地点を市区町村界が通っていて、その北側が共和町で南側が蘭越町である。この大会では、道道66号（パノラマライン）までチーム行動であり、ここから先は隊行動となる。パノラマラインを少し歩き、チセヌプリの登山口へ向かう。

チセヌプリは、アイヌ語で「家形の山」という意味である。台形の山であり、頂上が平坦に見えるのは、浅いクレーターによりへこんでいるためである。

チセヌプリの登山口は道道66号（パノラマライン）にあり、ここはチセヌプリとニトヌプリのコルである。標識には「北口」とあるが、実際にはチセヌプリの真東に位置し、登山口の標高は832mである。頂上までの標高差は303mである。登山口から山を見ると、かん木に覆われているのが見える。かん木に隠されて下からはわからないが、下はごろごろの岩である。

高度が上がると、斜面は、笹とダケカンバに覆われる。振り返ると（東を見ると）ニトヌプリが見え、ニトヌプリの後方にはイワオヌプリ、ニセコアンヌプリ、羊蹄山が見える。チセヌプリの頂上は平坦な草地であり、市区町村界が通っている。その北側は共和町で南側が蘭越町である。ハイマツ越しに浅い火口底にできた二つの沼と周囲に広がる湿原が見える。沼は大きい方で直径10mほど。モウセンゴケ、ツルコケモモ、イワイチョウ、ショウジョウバカマ、タチギボウシなどの湿原性の高山植物を見ることができる。

チセヌプリを西に下りると、西口（湯本温泉）コースとの分岐が、標高870m付近にある。この分岐は蘭越町に位置する。分岐から南に進むと、湯本温泉に至るが、廃道となっており、立ち入ることはできない。

分岐を北西に進むと、チシマザサに覆われたチセヌプリとシャクナゲ岳のコルの分岐に出る。コルの分岐を右（北）に向かうと長沼へ、左（北西）に向かうとシャクナゲ岳に続く。この分岐も蘭越町に位置する。

コルの分岐から北へ進むと長沼の沼の南端に出る。長沼は南北に長い沼で、登山道は西岸をたどる。初夏には雪解け水により沼の水かさが増し、登山道が水没していることもある。

長沼の北には分岐があり、右（北東）に進むと道道66号と神仙沼に至り、左（北西）に進むと、こちらも道道66号に至る。ここでは、神仙沼方面へ向かう。長沼から神仙沼にかけては、チシマザサとダケカンバ、時にハイマツが混じる道である。

神仙沼の手前に分岐があり、左（北）に向かうと道道66号沿いにある神仙沼レストハウス（レストランと大きな駐車場のある休憩所）に至り、右（東）に進むと神仙沼に着く。神仙沼から神仙沼レストハウスまでは木道が設置されている。神仙沼レストハウスの標高はおおよそ750mであり、共和町に位置する。神仙沼レストハウスが今回の山行のゴールとなる。

コース概況2 羊蹄山 真狩コースから比羅夫コース

羊蹄山は、円錐形（コニーデ型）の成層火山である。羊蹄山の活動は、約5～6万年前から開始し、4万年前までに古羊蹄山が形成され、その山体の大規模崩壊の後、新羊蹄山の活動が開始した。約4000年前の噴火による溶岩流は、現在の倶知安町市街の一部まで到達している。最後の噴火は約2500年前の山頂噴火である。現在、噴気活動は認められない。羊蹄山は別名「蝦夷富士」と呼ばれている。羊蹄山地域は（1949年）昭和24年から支笏洞爺国立公園に指定されている。

日本書紀に659年に阿倍比羅夫（あべのひらふ）が後方羊蹄（しりへし）に政庁を置いたと記され、松浦武四郎がこれをもとに山の名を後方羊蹄山（しりべしやま）と名付けた。羊蹄山のアイヌ名は「マツカリヌプリ」である。

この日の山行で使用する国土地理院発行25,000分の1地形図の図葉名は、「羊蹄山」と「倶知安」であるが、いずれも磁北は西偏およそ10度である。この山への登山コースは比羅夫（倶知安）コースのほか真狩コース、喜茂別（留産）コース、京極コースの4つがある。

羊蹄山は垂直分布が明瞭な山で、シナノキやエゾイタヤの大径木を含む森林が山麓から二合目（500～700m）あたりまで見られる。その上の四合目（700～1000m）近くなると、針葉樹のエゾマツとダケカンバが優勢となり、それ以上は矮小化・耐雪圧型化したダケカンバが優占する。そして九合目以上は高山植生が優占する高山帯になる。7月上旬から8月上旬には標高1700m以上で100種以上の高山植物が花を咲かせる。植生が豊かなため生息している動物類も多く、キタキツネ、イタチ、エゾクロテン、エゾリス、シマリス、エゾモモンガ、エゾユキウサギなどの哺乳類が多数生息している。野鳥も130種以上確認され、その中には日本国内最大のキツツキであるクマゲラも含まれる。

この日の山行は、真狩キャンプ場の奥にある登山口のすこし手前からチーム行動でスタートする。コースの途中で水場はない。しばらくは林の中を進み、見通しはきかない。すぐに寄生火山である南コブへの分岐点を通る。南コブの標高は650.1mである。南コブ分岐を過ぎると間もなく二合目である。四合目から先は傾斜がきつくなり、ジグザグの道となる。斜面を登ると、時折、洞爺湖、昭和新山、有珠山が見える。

六合目手前で、急なガレ場を登っていく。初夏は残雪があり、道を間違えないよう注意が必要だ。標高1600mの八合目から、山頂から南西にのびる尾根を巻き空沢のガレ場を通るが、初夏には残雪が残りトラバースする際は注意が必要である。この付近で、イワギキョウ、イワブクロなどの高山植物が現れる。視界も開けて真狩が見られるようになり、噴火湾や、渡島半島の駒ヶ岳も見る事ができる。やがて、九合目手前の分岐点だ。ここの標高はおよそ1660mである。分岐を右（東）に進むと外輪山に出る。そこまでに、マルバシモツケ、エゾノツガザクラ、ハクサンチドリ、ミネアザミなどが見られる。今回はこの分岐の左（北）のルートをとる。

すぐに避難小屋が見えてくる。避難小屋の標高はおよそ1670～1680mであり、ニセコ町に位置する。避難小屋までの道の両端には、イワブクロ、ウメバチソウ、ハイオトギリ、タカネニガナなどが見られる。この大会では、避難小屋までチーム行動であり、ここから先は隊行動となる。

避難小屋には山開き期間内は、管理人が常駐していて、避難小屋の維持管理と併せて、「自然保護監視員」として、施設の維持管理、衛生状態、利用状況等の管理に関する現地指導と、自然公園の環境の保全及び監視・指導を行っている。避難小屋に宿泊することは可能ではあるが、小屋はあくまで緊急避難用と

なるので、倶知安町は登山者に日帰り登山を最優先とした計画を立てるようお願いしている。また、羊蹄山登山道・避難小屋周辺などでのテント泊は自然公園法で禁止されている。

現在の避難小屋は、環境省が平成26年度に、老朽化した旧避難小屋の隣に建設した。旧避難小屋は、平成28年度に後志総合振興局環境生活課が解体したが、旧避難小屋の跡地は環境省ほか関係機関と協議の上、当面の立入を制限し自然植生の復元を図る予定である。

避難小屋を通過してさらに進めば、左手に星ヶ池があり、そのまま比羅夫コースに合流する。合流地点の標高はおよそ1680mであり、比羅夫コースの九合目になる。

この分岐を右（東）に登ってゆくと、左手にはカール状の地形が見られる。標高1790m付近の分岐を直進する（東に向かう）と、火口の縁に出る。目の前の火口のそこに見られるのは母釜と子釜であり、倶知安町に位置する。一番大きな火口は父釜と呼ばれ、周囲5km、深さは200m、最大径は750mある。母釜の北にある北山の標高は1843.4mである。

母釜と子釜を越えてピークを目指す。火口縁の北側には山火事で枯死したハイマツが見られる。京極コースと合流するとピークは目の前である。ピーク付近の三角点の標高は、1892.7mであり、真狩岳と呼ばれる。その先にある、羊蹄山の最高点は1898mである。

火口周辺は高山植物が多い。オノエリンドウ、タカネキタアザミ、ヒメイワタデ、メアカンキンバイ、ミヤマキンバイ、イワギキョウ、コメバツガザクラ、エゾノツガザクラ、キバナシャクナゲなどである。オノエリンドウは日本アルプス以外には羊蹄山にしか分布しない。タカネキタアザミは大雪山・十勝岳連峰・戸蔭別岳・羊蹄山の特産である。メアカンキンバイは羊蹄山が南限と言われている。

コマクサはもともと羊蹄山や樽前山には自生していなかったが、人為的に種子が持ち込まれたことにより、移入・定着するようになった。人為的な移入が本来の生物分布を変えてしまう恐れがあることから、羊蹄山や樽前山では「コマクサの除去」が行われている。なお、国立公園内でコマクサのような国内外来種を含め、植物を損傷（切り取る、傷つける）、採取（根っこごと取る）する場合には、事前に許可を要する場合があります、注意が必要だ。

羊蹄山は成層火山なので、アップダウンがなく、低地から高山へと植物の垂直分布の様子が顕著なので、比羅夫コースと山頂部が「後方羊蹄山（しりべしやま）の高山植物帯」として天然記念物に指定されている。指定を受けたのは1921年（大正10年）である。

下山は、北山を経由し、比羅夫コースの登山口を目指す。避難小屋へ向かう分岐付近にはハイマツが多く、岩れきに覆われている。ここから下は、つづら折りとなっている。六合目付近では、チシマザザ、ダケカンバ、ハイマツが見られる。五合目付近では、ダケカンバ、ウコンウツギが見られる。

五合目から下では、エゾマツの林が現れ、三合目付近まで続く。特に、四、五合目付近には大木がある。このようなエゾマツの林は羊蹄山の他のコースでは見られない。二合目から下はジグザグ道となる。

一合目付近の風穴には、暗い穴の中に黄緑色に光るヒカリゴケが見られる。天然の林が見られるが、登山口に近づくにつれ、トドマツ、カラマツの人工林となる。登山口には駐車場とトイレと水場が整備されている。登山口の下には、半月湖があり、その周りを一周できる遊歩道が整備されている。半月湖周辺はエゾマツやトドマツの針葉樹とイタヤカエデやダケカンバなどの広葉樹が混成する針広混交林となっており、その中には直径が1mを超えるミズナラ等の大木を見ることがある。周辺の森ではキビタキに代表される夏鳥が多く、キツツキ類やカラ類が見られ、湖面には、渡りの時期にカモ類が飛来し、森林ではエゾリスやシマリス、モモンガなどが生息している。